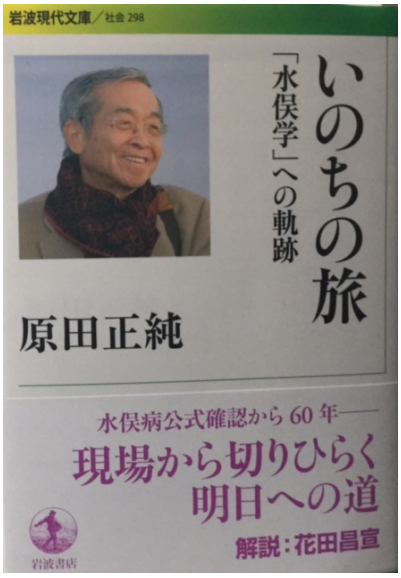
いのちの旅　「水俣学」への軌跡

原田正純先生の「岩波現代文庫」新刊である。表紙カバー裏の花田昌宣・熊本学園大学教授、水俣学研究センター長の解説から―有機水銀中毒「水俣病」の公式確認から60年が過ぎた。今なお環境汚染、原発事故、薬害禍など、命と尊厳を脅かす深刻な問題が世界各地で跡を絶たない。人類の負の遺産としての「水俣」をあらゆる角度から捉えなおし将来に活かすべく、水俣学を提唱した原田正純医師（1934–2012）が、様々な現場を歩き、人びとと出会う中で、希望の原点を探った思索と行動の記録。



本書は2002年4月1日から同6月29日まで中日新聞、東京新聞、西日本新聞に連載したものに手を加えたものである。「水俣学」の扉から。

水俣病事件でわたしがもっとも学ばされたものは、「何のために研究をするかという研究のあり方、専門家とは何か」ということだった。大学のあり方も含めてわたしのこの水俣病を取り巻くさまざまな経験から、何か教訓を若い人に残したいという想いがある。しかし、あくまでこれはわたしの一つの生き方であり、人それぞれ生き方は違う。その多様な考え方、生き方をお互いに認め合うこともまた水俣病から学んだのである。

わたしは医師になって40年間、普通の医師では経験できないさまざまの体験や事件に遭遇したことをこの10年間に、いろいろ書きまくった。しかし、ただそれを事実として、歴史的事件として伝えるのでなく、何か理論化、体系化できないか模索したいと思うようになってきた。模索は続いた。その時、一つのヒントになったのは足尾鉱毒事件であった。

本書は、さまざま事例の中から「水俣学」を意識しながら書き下ろしたエッセイ集である。これによっても「水俣学」が重厚で、堅苦しい、とり付き難い特殊な「学」をめざしているのではないことが分かってもらえるだろう。誰にでもこの扉は開かれている。

新聞に連載されたエッセイであり、とにかく読みやすく、原田先生の心意気が伝わってくる。原田先生ならではの豊富な経験が、コンパクトに綴られ、「水俣学」への扉を開いている。先生のこころに迫る「いのちの旅」、先生の「文章」から学ぶことは多い。一読をすすめたい。

（2016年4月23日）